

四国遍路の江戸時代における変化

稲田 道彦（香川大学経済学部教授）

[本城先生]

それではただ今より、午後からの講演を開始したいと思います。最初は稲田先生で、「四国遍路の江戸時代における変化」であります。先生よろしくお願ひいたします。

『四国遍路の江戸時代における変化』

稲田 道彦 香川大学経済学部教授

[稲田先生]

どうぞ、よろしくお願ひします。今日は「四国遍路の江戸時代における変化」という少し大きなタイトルで、話をしてみたいと思っています。

本日の話

- 1 真念以前の時代の四国邊路
- 2 真念の時代の四国徧禮の変化
- 3 幕末の時代の四国遍路
- 4 巡礼としての四国遍路

四国遍路の全体像を江戸時代に初めて文字で記し、出版した人物に真念しんねんという人がいます。今日の話は4つありまして、その真念以前の時代の四国遍路と、それから真念時代の四国遍路の変化について話をし、そして幕末時代の四国遍路に移り、それから明治時代以降、個人の自由な巡礼が許される時代の現代の四国遍路、という4つの事に関して四国遍路の特色を考えるとという内容で進めて行きたいと思っています。

このスライドにある四国遍路の文字、「邊路」「徧禮」「遍路」、これは全部「へんろ」と読むのですが、文字が違っております。話を進めていく中で説明していきたいと思っています。

では、草創期の四国辺路ということで。どうも江戸時代以前の四国遍路というと、弘法大師空海の自伝、今昔物語、それから梁塵秘抄りょうじんひしょう、この3が当時の遍路を示す史料として使われます。弘法大師も自伝の中で、石鎚山と太龍ヶ岳と室戸岬で修行したと書いてあります。

1 草創期の四国辺路

- 弘法大師空海(774~835)
石鎚山、太龍ヶ岳、室戸岬(御厨人窟) ここでどんな修行をしたのか 崖を攀じ登る、断食、虚空蔵求聞持法の真言を唱える
- 今昔物語 「四国の辺地を通る僧知らぬ所へ行って馬に打ちならざるはなし第十四」1200頃
- 梁塵秘抄「我らが修行せし様は、忍襦袢をば肩に掛け、また笈を負ひ、衣はいつとなくしぼたれて、四国の辺地をぞ常に踏む」1180
- 山岳、洞窟、岩峯、海岸などを修行場所にして、斗敷する頭陀・聖と称する僧侶が修行した。

その他の所に行ったということは、どこにも書いていないので、そのあたりは議論が分かれることになっております。では、弘法大師はどんな修行をしたのでしょうか、崖をよじ登ったと書いています。それから断食したと書いています。弘法大師がした修業を想像してみますと、虚空蔵求聞持法こくうぞうぐもんじほうの真言を100万弁唱えたといわれます。1日に1万回唱えて100日を要します。だいたい1万回唱えるのに6時間から7時間かかると聞いています。正座して、その心を清めて、というのを100日続けるということを考えてみると、簡単なことではありません。自分の肉体をいじめる鍛錬をしながら、自分の心を鍛えるというような修業をしたのだなと思います。今の我々の知識から総合すると、断食による体の衰弱の上に、細心の注意を払いながら一つの行動を繰り返す行動です。精神を研ぎ澄ます修業で、瞑想、さらにそれが宗教的な妄想をもさそったのでないかと考えます。

今昔物語では「四国の辺地へんじを通る僧が知らぬ所に来て、馬に打ちならさるはなし」、という物語が出てきます。ここで辺地という言葉があつて、これが四国遍路修行の前身の言い方だというふうに考えられています。辺地という言葉だけではどういう修行をしたのか分かりませんが、四国の周りを廻っている僧が、夜、宿がなくて山中に3人で分け入って、宿を頼んだ家で、主人により1人ずつ馬に変えられていくという話で、そして最後の1人が逃げて来た、という話になっています。四国の辺地を巡ることが修行と考えられます。不思議な場所で不思議な体験をすることが修行だったのかもしれませんが。次に梁塵秘抄には「我らが修業せし様は 忍袴袈裟にんくけさをば肩に掛け また笈おひを負ひ 衣はいつとなくしほたれて 四国の辺地をぞ常に踏む」という、その時代の俗謡が書きとめられていて四国の海岸を一途に歩く修行をしているようです。四国遍路に先立つ言葉としてはこの辺地という言葉があつて、辺地時代の修行は肉体と精神を鍛えるストイックなものだったと思われる。

江戸時代以前の資料としてはこの3つしか、今、我々は目にすることができません。結局、山岳だとか、洞窟だとか、岩峯だとか、海岸などを修業場所にして、斗敷とせうする頭陀聖ずたひじりと称する僧侶が修業をしたと想像しています。頭陀聖というのは僧侶の位でいうと修業をしながら学問をする僧侶であり、それからお寺の経済を支え、下働きをする僧侶です。庶民との窓口にもなります。別の言い方で聖とか、行者ともいわれました。このように、僧侶の位は大きく2段階になっていて、経典の研究をする学問僧に対して、頭陀聖という僧侶が仏教の実地の部門を担っていました。彼らによっておもに修行が続けられていました。

江戸時代に入ると、今、私がやっている真念という人のお話をさせていただきます。真念以前の記録を見ますと、澄禪ちようぜんという人が遍路の日記を残しています。承応2年、1653年

2江戸時代中期の変化

澄禪『四国遍路日記』(承応2年・1653)・大淀三千風『四国邊路海道記』(貞享2年・1685)『日本行脚文書 巻五』などの遍路行の日記
真念の「四国邊路道指南」の出版(貞享4年1687)

○88の札所寺院の記述、88の札所を参拝し、四国を巡ることが四国遍路であるという形が作られた。これを書き記し出版した。

○一般大衆の四国遍路への参加

です。それから、大淀三千風^{おおよどみちかぜ}という人が貞享2年、1685年に四国邊路海道記を残しています。澄禅というのはお坊さんで、四国の120くらいのお寺を廻っています。この中に88カ所の寺は全部含まれています。ですから、120ぐらい廻りながら88のお寺を含む巡礼のようなものがあつた。いや確かにもうこの頃には88というのを意識していたのかも分かりません。

それから、大淀三千風^{おおよどみちかぜ}というのは、俳句の宗匠です。各地で俳句の会を開きながら、四国を回っています。彼からも88のお寺という言葉が出てきますので、当時から88という言葉はあつたようです。ですから、真念が出てくる以前に88のお寺を回る巡礼のようなものが既にあつたであろうと考えられています。真念は貞享4年、1687年に四国邊路道指南^{しこくへんろみちしるべ}というガイドブックを書きます。それ以前とくらべると、この本の特徴は、88の寺院を参拝して回ることが四国遍路だと主張していることです。つまり、88の札所を参拝し、その寺の本尊と弘法大師を参拝することが四国遍路であるといっています。

それまでは四国の辺々を歩いて回りながら、修業をするということが意識されている巡礼でした。それに対してある決まったお寺を参拝して回ることが四国遍路である、というふうに四国遍路のあり方が変わりました。それから、それまで専門家の僧侶が回っていた四国遍路が、一般大衆が四国を回るようになったことです。ごく普通の人が四国を回るようになりました。これがこの時代の大きな変化で、そして、それが後の時代に引き継がれてきたのであろうというように考えております。ごく普通の人が四国を回るようになり、こういう道案内の本が必要になりました。

ここにありますが元の本で、原本はこんな小さな本なのです。古本屋さんで買わせていただきました。四国徧禮道指南^{しこくへんろみちしるべ}、「みちしるべ」というふうに読んで、これを「此の道しるべのなれる事、真念法師^{しんねん}、五相三蜜^{ごそうさんみつ}の繩牀^{じょうしょう}を出でて、南海^{なんかい}を千里^{せんり}の」というふうに読んでいくのですが、私も最初は全く読めなかったものが、これに関わっているうちにだんだん読めるようになってきました。

この本の文章と読み方を書いた本を瀬戸内圏研究センターから出版させていただきました。四国徧禮道指南^{しこくへんろみちしるべ}という題名の本ですが、在庫はもう無くなってしまいました。そして、これを見た出版社が「現代文と現代語訳、地図を付けて出版しませんか」というふうに言



ってくださいまして、この夏に出版することができました。それがこの本です。読み下し文と、現代語訳とそれから地図を付けました。地名がいっぱい出てくるのですが、その地名を地図で表現し遍路道を考察しています。

で、今日はその真念の話をするのですが、四国徧禮道指南は、貞享4年の跋辞^{ぼつじ}というか。その後ろの方に貞享4年という言葉は出てこないのですが、貞享丁卯の年11月に書いたということが出てくるので、貞享4年に比定されています。これは再刻^{さいこく}というのですか、全部の版木をもう一度彫って、彫り直した再版本だと考えられています。

どこの本屋が版權を持っていて、どんなふうに売り渡したかというのを長期間にわたっ

てまとめた大坂本屋仲間という非常に厚い本があります。江戸時代の本屋の版權の売買の歴史を研究なさっている新居正甫^{にい まさみち}さんという方が、その中から拾い出して、この本の出版の権利を誰が買って、どんなふうに渡ったか^{たど}を辿ってみると、どうもこの再刻本は元禄11年1698年から享保9年1724年の間に出版されたのであろうと推定されています。

それは、この本の中に地名が出てきます。例えば、「徳島に渡る時には大阪の河口のこういう舟問屋に行って、舟に乗りなさい」と書いています。この舟問屋のあり方、その舟問屋が転々としていくのを参考にしながら、何年から何年というようなことを、また、この頃に大坂が火事になって、丁度、本屋さんのあたりが全部焼けてしまって、一斉に前の版木を新しくしなければいけないという時期が、享保9年で、それまでの間にこの本が作られたというふうに新居正甫^{にい まさみち}さんは言われています。

この本の作られる前の版は5回埋め木だとか、版の中に版木を埋めたり、それから削ったりして、元の版木の改刻、補刻化の作業、もう版を刷るには磨滅して読めないぐらいまでに刷ってしまう、それで新しい版木を作ったというふうに書いています。私のところには、この改版本がやってきました。

四国徧禮道指南

- 貞享4年(1687)年の跋辞をもつが、再刻による版木を用いた再版本である。
- 全面的に版木を新しく彫りなおしている。
- 新居正甫氏の研究によると1698(元禄11)～1724(享保9)年の間に出版された。
- この改版本が出版される以前に5回の埋め木や削除による元の版木の改刻、補刻がなされている。版木が磨滅した。

邊路と徧禮、この本の中で途中から「へんろ」が変わって行きます。読みはもちろん「へんろ」なのですが、初版本ではこの邊路の文字を使っています。初版本の5回目の改刻から、この徧禮を使うようになっているというふうに言われています。この邊はこの辺ですね。だから辺々のへんで、路は周りの道という意味です。こちらの徧はあまねく広く、どこでも、というような意味です。また下の字の禮は、現在ではこの礼の字を使います。「礼」

という字は、道は道なのですけれども、人の生きる道をさします。四国遍路が四国の縁辺を歩く人という意味であったのに対し、四国徧禮には「人の生きる道を模索する人」の意味を込めました。

この本を出す時、眞念達は3人でグループを作っていて、一人は学僧の寂本^{じやくほん}、それから、もう一人は洪卓^{こうたく}という序論を書いた人がいるのですが、洪卓は眞念と同じく聖の仲間であったといわれています。学僧の寂本が「この周りの道というふうな邊路でなくて、この徧禮を使ったらどうか」というふうに提案したのではないかと先学の近藤喜博さんが指摘しております。

江戸時代はこの徧禮がずうっと使われます。結局、この徧と今の遍は同じ意味を持つ字です。今は元に帰って、禮は路になってしまいました。つまり今はあまねく道に行く人を意味する遍路を使うようになりました。だから「へんろ」と言いながら、どの漢字を使うかということで、少しずつ時代が変わって行きます。

ガイドブックとしての「四国徧禮道指南」について話を進めます。これは四国遍路のガイドブックで、「どんなふうに行きなさい」という、歩き方を示しております。基本的に書かれているのは寺院で、それから、台地か、平地か、という地形、地貌^{ちぼう}といますか、「どういう場所にお寺があります」、それから、「どの方角を向いています」、それから住所と書きましたが、それでも、「どういうところにありますよ」ということが書いてあります。それから

本尊の描画があって、その本尊の大きさや立っているか座っているか、本尊名、それから本尊を誰が作ったか、それから御詠歌が書いてあります。

そして、説明に入るのですけれども、次の札所までに通過する地名、坂、川の名前、宿を貸す人の名前、各地の堂の名前が書いてあります。「どこを通りなさい」という地名が書

邊路(辺路)と徧禮(徧礼)

どちらも読みは「へんろ」

初版本では「邊路」の文字を使う。初版本の5回目の改刻から「徧禮」を使うようになる。

学僧の寂本の考えが大きいと言われる。(近藤喜博氏の指摘)

各札所寺院の説明

寺院名、地形・地貌、方角、住所

本尊の描画、大きさ、本尊名、製作者

御詠歌

次の札所までに通過する地名、坂、川の名、宿を貸す人の名、各地の堂の名前

眞念が特記すべきと考えた沿線の風景や、伝承、由来、歴史的出来事

いてあります。それから、川の名前は非常に小さいものまで書いてあります。というのは、どうもその当時の人にとって、川というのが難所の一つだと思います。要するに橋が無いですから、大河は舟で渡るしかないし、他は歩いて渡らなければいけません。大水が出ると困ったことになります。それから、宿を貸す人の名前がかなり出てきます。これは善意で遍路に宿を貸した人だろうと思われます。それから各地の阿弥陀堂だとか、大師堂・不動堂だとか、堂の名前がたくさん出てきます。これは、宿がないときに、宿泊できる場所として、「ここに行けば泊まることができますよ」というような只で泊まれる場所を書いてあります。それから、真念がその他に特記すべきと考えた沿線の風景や伝承、由来、歴史的出来事が書いてあります。でも、これは非常に偏っていて、真念が書きたいと思うところはすごく長く書いてあるし、他の所はほとんど書いていません。基本的にはこれだけを書きながら、次の寺院へと前に前に進めて行く形でガイドブックが出来上がっております。

もう一つ、その真念初版本の記述の最後のところに、こんな記述があります。「大師御邊路の道法(みちのり)は四百八十八里といひつたふ 往古(いにしへ)は横堂のこりなくおがみめぐり給ひ 險阻をしのぎ 谷ふかきくず屋まで乞食(こつじき)させたまえひしがゆへなりと云々 今は劣根(れつこん)僅かに八十八ヶの札所(はかり)計(ばかり)巡拝し 往還の大道にて手を拱(こまねく)御世なれば 三百有余里の 道のりとなりぬ」という記述がある。最後の方に出てきます。つまり、以前に 480 里あったのが、江戸時代の今は 300 有里と縮まったのです。昔はよほど小さなお堂まで全部回ったから、かなり距離が長くてたくさんあった。だから、たぶん真念の前の時代にはそういういろんな札所をたくさん廻っていた。それが 88 というふうに整理したことによって、距離が短くなったと書いてあります。

初版本にはこれを書いていたのですけれども、途中から消えてしまいます。こういう経緯で真念というのは 88 カ所を書き記していきます。さっき言いましたようにこの時代に、「88 の寺院が四国遍路の巡礼である。88 のお寺を廻れば四国遍路が完成するのだ」というふうに作り替えられたというように、今は考えております。というのは、それまではいろいろな所で修業をして、厳しく自身を宗教的に鍛えるという意識が強かったので、お堂に参ることよりも修業することが大事だったのだけど、「今は 88 の寺院を廻れば四国

真念初版本の記述

「大師御邊路の道法(みちのり)は四百八十八里といひつたふ 往古(いにしへ)は横堂のこりなくおがみめぐり給ひ 險阻をしのぎ 谷ふかきくず屋まで乞食(こつじき)させたまひしがゆへなりと云々 今は劣(れつ)根(こん)僅かに八十八ヶの札所計(ばかり)巡拝し 往還の大道にて手を拱(こまねく)御世なれば 三百有余里の 道のりとなりぬ」

①88の寺院参詣が四国遍路の巡礼である

弘法大師信仰の深まり。

札所寺院での本堂と大師堂の設置。

「男女ともに光明真言 大師の宝号にて回向し 其札所の歌三遍よむなり」

一 負俵 めんつう 笠 杖 ござ 脚絆 足半 其外資具心にまかせらるべし惣じて足半にてつとむべし」

を巡礼したことになりますよ」というふうに言っております。

本堂と大師堂の設置というふうにありますけれども、澄禪^{ちようぜん}が回った20年ぐらい前に回っているのですが、その時代には大師堂がないお寺がかなりありました。少し後に出版された「四国徧禮靈場記」にも大師堂のない札所が出てきます。この後になると全部のところに大師堂ができます。ですから弘法大師信仰というものの高まりがこの時代にあったのだらうと考えます。「弘法大師にお願いすればいろいろなことが叶う」というふうに人々が考える時代があって、次第に弘法大師を慕いながら四国を廻るというふうな形に作り替えられていくのだと思っております。

ですから、最初の時代を修業の時代ととらえます。修業をするということから「非常に自分自身を修練するというのがすごく大事だったのが、次の時代に88のお寺を廻れば巡礼ができますというふうに作り替えられていきます。で、この中に「男女ともに光明真言 太子の宝号にて回向し其札所の歌三遍よむなり」というふうに書いてあって、これが拝み方です。これは今も続いてきております。でも、今、私達が一番よく読む般若心経が出てきません。光明真言、「おんころころ しゃのうま かぼかだらまに はんどま じんばら」、それから「南無大師遍照金剛」、そして、ご詠歌を三遍読みますというふうになっております。

持ち物も負俵^{おいだわら}、負俵というのはござの中に衣類を巻き込んで背負う俵。めんつうというのは曲げ木で作ったお椀だそうです。お米を貰ったり、それから食べ物を貰ったりするのがめんつうです。「傘、杖、ござ、脚絆、足半、其外の資具は心にまかせられるべし惣じて足半にてつとむべし」というふうに書いてありまして、持ち物もこの時代に指定されています。ガイドブックですから、このようなものを持って行きなさいと書いています。

それから、一般大衆が四国遍路へ参加するようになります。真念はこんなふうに書いております。「此本の中に宿をほどこす衆 書付たる所少々これ有 是ハ某^{それがし} 数度徧礼の時 日くれ宿なき時ハ難儀に及びしにより 心ざしの人をすゝめ 諸徧礼にもかくあらんと書付し處^{ところ}に 人により定かたる宿のやうに心なし衆も有へけれども 宿にも用事差し合の節ハ徧禮の人 料簡有事也」というふうに書いてありまして、「心ざしの人をすゝめ 諸徧

②一般大衆の四国遍路への参加

「此本の中に宿ほどこす衆 書付たる所少々これ有 是ハ某(それがし)数度徧礼の時 日くれ宿なき時ハ難儀に及びしにより 心ざしの人をすゝめ 諸徧礼にもかくあらんと書付し處に 人により定かたる宿のやうに心なし衆も有へけれども 宿にも用事差し合の節ハ徧禮の人 料簡有事也」

功德、奇跡、病氣平癒、などを期待する遍路修行。四国徧禮功德記』真念、元禄3(1690)年

礼にもかくあらんと書付し處^{ところ}に」という。どうも、宿が一番問題になっています。それまでの人はどこにでも野宿していたのに、大衆がやって来るようになり、宿がないことがすごく大きな問題になって、真念はその志のある人に薦めて宿を貸すようお願いをしました。その人の名前が書いてあります。「どここの何とかという人が宿を貸してくれますよ」というふうに書いてあり、人の名前が40人ぐらい出てきます。ですから、このガイドブ

ックでは宿泊というのがすごく大きな意味を持っていたと思います。このようにして、一般大衆が四国遍路へやってくるようになってきます。どうも、これを受けて真念は四国徧禮功德記という本を出します。一般大衆はお参りすることによって、功德だとか奇跡だとか病氣平癒などの願いが叶うことを期待するような形で巡礼をする。つまり、それまでの修業をする四国邊路からお願いをする修業徧禮で、四国を廻るといような形に変わっていく。それが江戸時代のこういう時代の出来事だと思っております。

真念という人は「自身を斗藪する頭陀」と表現するなど、山野で修業する四国「辺路」または「辺地」修業を経験した僧だろうというふうに考えています。実はその他の本で、真念は自分のことを 20 度回ると書いてありますから、かなりの頻度で四国を廻った人だと思えます。札所以外の奥の院の記述に思いがあったと思っております。例えば隕石の落下を思わせる取星寺の記述ですと、弘法大師が鉤で黒い星を引き寄せたので、上から大きな石が落ちてきた。というような記述があります。それから慈眼寺の洞窟の記述は鍾乳洞なのですが、そこで修業する様子が非常に長い頁で書かれています。今、我々が鍾乳洞というと大きな穴を考えるのですが、本当に体が一つ入るぐらいのちいさな穴を越えて行って、その大きな穴に出るようなそういう鍾乳洞です。それを禪定と称して回って行きます。

それから、神峰寺山麓の唐浜の石があります。弘法大師が貝をたくさん持っている人に「貝をくれ」と言ったら、「これは喰えない貝だ」と言って、けちんぼしたら、その弘法大師が後の世の人のためにと祈祷し、それが石になってしまう、という記述があります。実はその場所に行くと、高さが 10m ぐらいで、幅が何百 m もの貝の化石地帯がある。不思議な自然現象を弘法大師に結び付け、彼のなした奇跡として、人々に示します。単に不思議な話というよりも、こういう証拠があるから弘法大師の霊力を信じなさいという文脈のようです。

今、四国遍路は石鎚山には登りません。遥拝するだけなのですけれども、真念は 6 月の 1 日と 2 日だけしか山に登ることができないとか、いろいろ書いてありますので、彼自身は石鎚山に行っている、と考えられます。今の札所以外の場所へ行って修業する時代を経験したうえで、その時代の中で彼は 88 のお寺に絞ったガイドブックを書いた人だと私は想像しています。要するに参拝して四国遍路を廻るといだけではなくて、実体験によって得られる宗教的な考えといようなものを大切にしたいと考えた人だったのだらうと思っております。たぶん、そのお寺の名前だとか、本尊とかといふようなものを書きながら、彼が 88 のお寺以外の道沿いのできごとを長くかなり詳しく書くことによって、今の 88 に

真念という人①

自身を斗藪する頭陀と表現するなど、山野で修行する四国「辺路」または「辺地」修行を経験した僧。札所以外の奥の院の記述に思いがあった。隕石の落下を思わせる取星寺の記述や、慈眼寺の洞窟の記述、神峰寺山麓の唐浜の石貝の記述や、空海は行ったが、遍路が行かない石鎚山の記述などにより、参拝だけではなく実体験による得られる宗教的な感慨を大切に思っていたのではないかと。

なる前の時代にあった四国遍路の姿を示しているのだらうと思っております。

それから、遍路道の整備を行いました。それまでは遍路道で苦難、苦勞するのは修業なのだから当たり前だというふうに考えていたのが、大勢人が来るようになると、彼は宿の世話や、道標^{みちしるべ}を200建てたというふうに言っています。道標^{みちしるべ}をいっぱい建てる。それから、遍路が泊まれる遍路屋、遍路宿、庵を自分自身が建てます。標石^{しるいし}を分かれ道に建てる。そういうような形で遍路道の整備を行います。もし、前の時代ならば、遍路道というのは迷

って当たり前で、そこで、その迷うことがいろいろな経験を産むぐらいに考えていたものを、彼は人々が迷わないように、宿に入れるように遍路屋を建設し、人に薦めて遍路に宿を貸す人を募るというような形で、大衆が迷わず廻れるような整備を行っていきます。

真念は大坂の寺嶋^{てらじま}に居住したと言っております。彼の築いた人脈で、大坂の当時の出版文化と商人の富の蓄積を印刷出版に利用することができました。つまり大坂の真念の近くに住んでいた商人の寄進を受けて版木を起すことができました。それから印刷屋さんとかいろいろな人と人脈ができることでこの本は完成しました。それから西国33観音巡礼を既に知っていることで、大坂から四国を見ることで、客観的にガイドブックに何を記述す

べきかという判断に繋がったというふうに考えております。つまり、真念が大坂に住んでいたということで、四国の人々が自分達の所で四国遍路のことを書くというよりも、少し離れた場所で四国遍路を見ることができた、というふうに思っております。

真念という人②

遍路道の整備を行った。巡礼路での遍路の苦難を取り去る方向で尽力した。

道に迷わないために標石を分かれ道に建てた。200以上の標石に対して30余が現存する

遍路の宿舎の問題を解決しようとした。

遍路屋の建設、人に勧めて遍路に宿かす人を募った、堂などの情報を集め周知した。

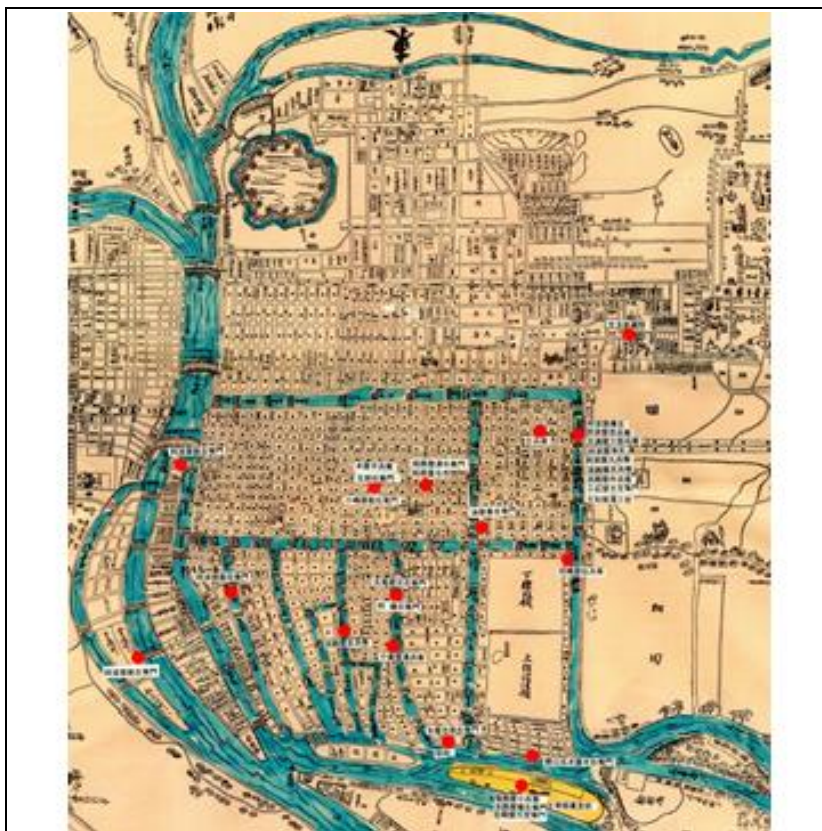
真念という人③

大坂の寺嶋に居住し、彼の築いた人脈により、大坂の出版文化と、商人の富の蓄積を印刷・出版に利用することができた。

また西国三十三観音巡礼を知っており、大坂から四国を見ることで、客観的にガイドブックに何を記述するべきかという判断につながった

西国 33 観音巡礼というのは四国遍路よりも古い巡礼の形で、これはお寺を廻る巡礼になっています。つまり、そこからお寺を廻る巡礼というヒントを得ているのではないか。これは私の想像なのですが、四国遍路に先立つ西国 33 観音巡礼というお寺を廻る巡礼を知っていたことが、四国遍路でお寺を回れば良いというような記述に繋がっていくのかもしれないと思います。これは、私の中ではまだ仮説の段階なのですが、たぶん、その前の時代は修業しているということを重点的に考えると、こういうようなまとめ方をしなかったのではないかとこのように思うことがあります。西国 33 観音巡礼を意識して、このガイドブックを書いていくことに繋がったのだらうと思います。

この黄色く塗っているのが寺嶋という島で、真念が住んでいたという場所です。今はもう大坂は川を埋め立てて地続きになっています。ここに野口氏木屋半兵衛門という、この本を出すための版木のスポンサーになった人が住んでいますし、それから本屋



さんがここに住んでいます。ところどころにスポンサーがいて、誰から金をもらったというのが、他の本に書いているのです。つまり、本当に町内会のような所でこの本ができています。

それから舟宿です。さっきの阿波屋というのは舟宿なのですが、ここにも阿波屋ということで、2カ所に住所があって、移転することによってこの本の出版名を特定することに繋がった人達です。まあ、本当に狭い範囲でこの本ができていたということが分かります。

真念後なのでですけど、「四国遍路道指南増補大成」という形で引き継がれていきます。内容はほとんど刷新されませんでした。ですから真念が記述した内容がほとんど引き継がれています。それよりも間違っって引用されている所がだんだん多くなっていきます。つまり、実際に四国を歩いて書いた人とそれを受け継ぎながら時代に合わせようとした人々との形で、「四国遍路道指南増補大成」というのが、明治になるまで出てきます。版木を変えながら、何度も何度も刷り直されていきます。

それから、納経帳があります。私は四国遍路をどのように廻ったのかというのを納経帳という別の部分で、今、見ているのですけれども、88の寺院といくつかの奥の院を回る巡礼が幕末まで続きます。つまり真念が言ったとおりの巡礼を人々は続けていきます。

本日のお話の3番目の部分に入ります。幕末から明治にかけて大きな変化があります。安政の大地震の後、土佐藩と宇和島藩が遍路の入国禁止令を出します。安政の大地震で道が荒れたというのが理由です。1800年をちょっと過ぎたぐらいのところで、遍路の入国を禁止します。それが明治まで約20年間続いています。つまり、地震の後であれば、復興したら解消されるのでしょうけれども、明治5年の納経帳まで土佐国と宇和島藩に遍路が入っておりません。

この頃に、土州17カ所遥拝所という納経印が出てきます。土州というのは土佐の国。17カ所というのは「土佐の国の17の札所を遥拝しましたよ」という1つの納経印です。実は土州には札所が16しかありません。「謎の1つはどこか」というような議論もあり、不思議な土州17カ所という存在です。

密かに私は23番薬王寺がだしたと推定しています。

真念後の出版

「四国偏禮道指南増補大成」という形で引き継がれていくが、内容が刷新されなかった。
現在も真念の記述した内容がほとんど引き継がれている。

納経帳の納経の仕方を見ると88の寺院といくつかの奥の院を参拝する巡礼が幕末まで続いた。

幕末から明治にかけての変化

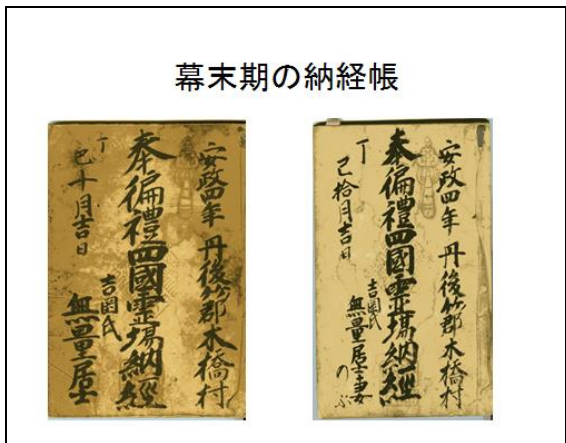
- 安政の地震後の土佐藩と宇和島藩の遍路政策の変化
- 明治時代になり廃仏毀釈政策がとられた。
- 神仏混淆の寺院は神社か寺院のどちらかを取るようになった。

土州十七ヶ所遥拝処

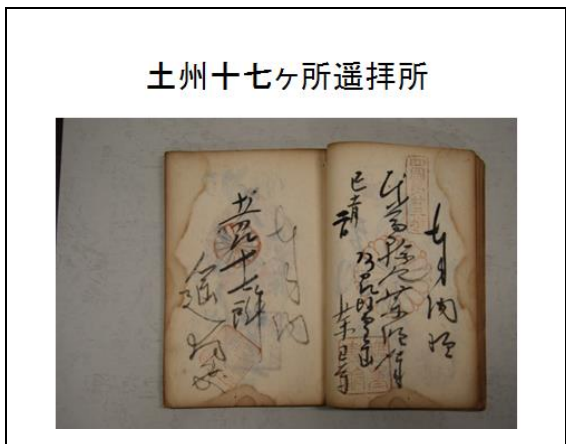
- 土州十七ヶ所遥拝処印のある納経帳
- 23番薬王寺が納経したと推定している。
- 遍路は巡礼路の変更を余儀なくされた。
- 明治5年の納経帳まで約20年続いた。
- 土佐藩と宇和島藩が同様の政策をとった

私がこの納経帳を持って、「お宅が納経を出したのではないのですか」というふうに言ったら、「いや違う」とおっしゃったのですけれども、何回か聞くうちに「うちが出したのかも知れない」というふうに変わってきています。たぶん薬王寺が出したものだと思っています。このお達しで、遍路は巡礼路の変更を余儀なくされます。どこが遍路の巡礼路になったのか、まだ謎は続いています。

これが安政4年の納経帳なのですけれども、私は今、納経帳をコレクションしていて、約100冊ぐらい持っているのですけれども、この安政元年から明治5年の納経帳までの全部に土佐の国が入っておりません。20冊ぐらい確かめたのですけれども、この時代以外の遍路は土佐と南予には入国しています。この納経帳は幕末期のもので、丹後竹郡木橋村 奉徧禮四国霊場納経、吉岡氏無量居士で奉徧禮四国霊場納経、吉岡氏無量居士妻のぶというふうに書いてあって、ご夫婦の納経帳になっております。

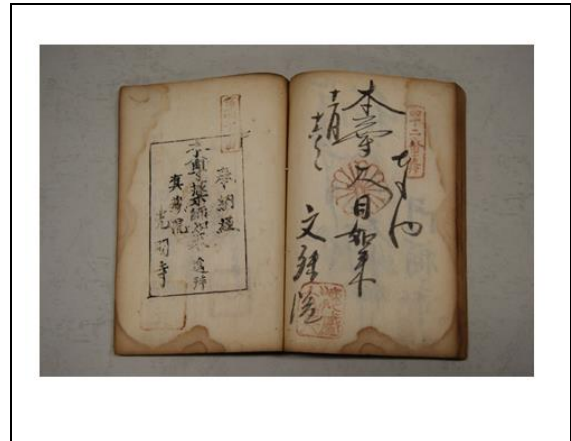


これがその土州17ヶ所遥拝所奉納という納経印です。で、土州17ヶ所分をこの一頁で済ましてしまう納経です。遥拝と言うシステムがあります。なぜそれを薬王寺が出したと考えるかということを書きます。ここ（写真を見てください）に奉納というふうに書いてあるのですけれども、その字を大きく崩しています。良く見ると、この奉納と、これ奉納経というのですけれども、同じ人が書いたように見えます。奉納経、奉納、崩し方がほとんど



ど一緒ではないかと考えると、本尊厄除け薬師如来、阿州、薬王山薬王寺という、薬王寺でこれを出したのではないかという一つの証拠になると、私自身は思っています。

また、南予でも同じように八坂寺の次に円福寺なんて今の札所にはないのですが、稲荷大明神の納経を出している。文殊院とか光明寺とか今、札所でないものまで南予の札所寺院の納経を出している。これは要するに、88カ所に行けなくなると、代替の巡礼路や寺院があったことを示しています。



吉岡無量居士さんは宇多津に上がってきて、東に廻って薬王寺で引き返します。どうも納経帳を見ていると 60 番横峰寺から、9 番大寶寺、次に岩屋寺に直接行き、松山平野に帰ってきます。今の遍路とは全然違う経路をたどっています。この時代、こういう遍路道をたどるのはかなり多いです。遍路道を変更せざるを得なかった。ということなのだけど、変更して良いのであれば、今の私達も完全に変更するのですけれども、「88 全部スタンプを埋めたいね」というような気持ちはあります。でも、もう幕末にはこれしかなかったということです。

土佐藩の遍路入国禁止政策をちょっと読みます。「大震に付き、遍路入込どころより、村継をもって御境目へ、送り出すべきこと。覚え。このたびの大震に付き、別して里前往還大破におよび、遍路ども順路あいなり難きに付き、入込みおりそうろう所の地下役は覚え書きをまとめあい添え、村継をもって送り出す旨、遍路、街道地下役ども下知候じょう、なお協道においても油断なきよう詮議さるべきなり。安政元年寅年」というような形で、要するに大変というのは安政の大地震で、「道が大破したので遍路を追い出しなさい」と言うようなおふれを出して、これが約 20 年間続いて、つまり遍路政策で、根底には土佐藩の遍路大嫌いという方針がありました。



土佐藩の遍路入国禁止政策

就大震辺路入込処ヨリ村継ヲ以御境目江可送出事
覚

此度之大変二付、別而里前往還筋大破二および、辺路共順路難相成二付き、入込居候所之地下役總覚書相添、村継ヲ以可送出旨、辺路街道地下役共江及下知候条、尚於協道も無油断可遂詮議也。

安政元年寅年十一月十四日 後藤助四郎
村々庄屋中
『憲章簿』喜代吉榮徳(1998)四国辺路研究第14号
41p

遍路が土佐藩に入るのを土佐藩は嫌いでした。なぜかと言うと、土佐の国は最も貧しい地域であるにもかかわらず、土佐藩の住民は遍路が来たというと、自分は食べるものがないのに遍路に物を上げてしまいます。藩当局はこの習俗を嫌いました。ですから土佐の国では、例えば甲浦という関所を通ると、「30日 で西の関所を出てしまいなさい」、「決められた遍路道以外を通ってはなりません」と言うようなおふれを出して、遍路の滞在日数を短くしようとしました。それで入国禁止政策が、約 20 年間も続きました、逆に巡礼の立場からいうと、88 寺院を全部回るのが巡礼ではないというふうに思う立場からすると、これで四国遍路が完結するのだろうかと考える問題があります。修行を遍路の目的にする人にはこれでも我慢できるでしょうし、88 の寺院を参拝することを目的にする人には不満足だったでしょう。

明治時代になって、^{はいぶつきしゃく}廃仏毀釈政策が取られていきます。^{こんこう}神仏混淆だった寺院は神社か寺院のどちらかを選択することになります。明治の大きな宗教変動です。それから、廃仏毀釈による変更というのはたくさんあります。最も有名なものをあげますと、30 番の土佐一ノ宮高賀茂神社、今の土佐神社です。今も大きく古くて良い神社なのですけども、江戸時代は札所寺院でした。^{たっちゅう}門近くの塔頭寺院の神宮寺と善楽寺が納経を交互にやっていました。

^{たっちゅうじいん}塔頭寺院の善楽寺・神宮寺はともに廃寺になります。つまり全部神社から追い出されています。以降、札所が安楽寺になります。市内の別のお寺に本尊を売り渡し、そこが札所になりました。1929 年、善楽寺が復興され札所を名乗るようになり、以降、30 番札所が 2ヶ所存在するようになり、昭和 4 年から 2ヶ所存在していました。この決着がつくのが平成 5 年です。平成 5 年元日から善楽寺が 30 番とし、安楽寺が奥の院になりました。明治の廃仏毀釈というのはいろんなところで影響が起こって行きます。

香川県でいくと、琴弾八幡宮、今の観音寺の琴弾八幡宮が札所でしたけれども、神恵院となり境内を追い出されて、観音寺の境内に移転するというようなことが起こっています。これが廃仏毀釈なのです。

廃仏毀釈政策による変更

- 第13番札所 一宮神社(大日寺)。
- 第27番札所 神楽神社(讃岐) (いったん廃寺となり廃格がなれり所となったが、1912年(大正元年)茨城縣稲家部郡白竹村山地跡院を移転し再興して神楽寺となる)。
- 第28番札所 大日寺(再興)。
- 第30番札所 土佐一ノ宮高賀茂大明神(土佐神社) (善楽寺・納経は神宮寺(別当寺)で行っていたが塔頭寺院の善楽寺とともに廃寺となり、以降札所が安楽寺に移った。1929年(昭和4年)善楽寺が復興され札所を名乗るようになり、以降第30番札所が2ヶ所存在することになるが、1993年(平成5年)元日から善楽寺が第30番札所と定められた。)
- 第33番札所 善楽寺(廃寺→再興)。
- 第37番札所 高岡神社(岩本寺)。
- 第41番札所 龍光寺(創建当初から神仏習合の寺であったが、神仏分離により旧本堂が稲荷社になった)。
- 第55番札所 別宮大山頂神社 別当寺・南光坊大講堂(観音堂)を本尊とする独立した寺になった)。
- 第57番札所 宗福寺、團圓八幡宮と分離独立)。
- 第60番札所 横峰寺(親王権統を祀る別当寺だったが廃寺になり、1909年(明治42年)再興する。)
- 第62番札所 玉持寺(再興)。
- 第64番札所 岩持寺(再興)。
- 第68番札所 琴弾八幡宮(神恵院となり観音寺境内に移転)。
- 第79番札所 摩尼降院(再興)。

もうまとめに入るのですけれども、88の寺院を巡り、本尊と弘法大師を参拝するということが四国遍路の特徴の一つだと思います。もし、修業する場所の聖地が札所だとすると、その聖地に行かなければ巡礼が成り立たないので、幕末や明治初期の改変はなかっただろうと考えられます。つまり、中世のような修業をするのが遍路だった時代には幕末のような改変と言うのは受け入れられなかった。どうしてもそこに行かなければ札所が成立しないのですから。88の寺院を廻ることが四国遍路だというふうに変えたというのは、巡礼の思想として、大きな改変だったんだろうと思っています。現在の四国遍路の特徴の接待や治め札、地元の人との関わり方は真念の時代に、要するに真念が書いたとおりに今もやっているということがすごくあります。

それから、江戸時代以前の修業というのは肉体的苦難とか、精神的苦難を経験することで、自分の精神性を高めるということが巡礼の大きな目標だったのですけれども、大衆参加が起ると、その巡礼の苦難を取り去る方向に動き、巡礼を達成し全部を廻ったという充足感が自分の祈願を達成できるという思いに重なるようになっていく。つまり、本尊や弘法大師の祈りの気持ちを廻るということを巡礼の中心に据えるという、まあ大衆化ということと、そのそういう形で、こういう気持ちに変貌としていったのだろうというふうになっております。

以上です。

[本城先生]

ありがとうございます。なかなか面白かったです。どうぞ皆様、ご質問をどうぞ。良く調べられましたですね。

[稲田先生]

後ろに置いているこの文庫本を出すために、真念の本を一生懸命読んだら、次にやるべきことは、やはり古い形の四国遍路を、もう少し抜き出してみたいなと思っております。良く分からないことが多いのですけれども、それでも先ほど慈眼寺の話をしたんですが、僕、慈眼寺の洞窟の中に入ってみました。体をくの字に曲げながら入って行くので、右足で蹴って、左足を斜めに出しながら行くと、穴の中に体がスパッとハマってしまいました。身動きが取れなくなって、「もう出て来れないのじゃあないか」という恐怖感に襲われました。つまりああいう恐怖感を感じながら、巡礼をやりながら、そして、それを乗り越えるというような気持ちが、随所にあったのではないかな。そのような気持ちで、四国遍路を少し

四国遍路という巡礼

88の寺院を巡り本尊と弘法大師を参拝することが四国遍路であることは特徴の一つ
もし修行をする場所である聖地が札所でありそれを参拝することが四国遍路であるとして、幕末の札所寺院の改変や変更はありえない。
現在も四国遍路の特徴の、接待、納め札、地元の人との関わり方は真念の時代に起源をもつものが多い。

見直してみたいと、今、思っております。

[本城先生]

いかがでしょうか。

[室井先生]

面白かったのです。しかし、どういうふうにな何を聞いて良いのかというのが、まだ頭の中で整理できていないので、的外れな話なのかもしれませんが、すみません。真念のガイドブックですね。大坂で作られた本が売れたみたいですが、恐らくそれを読んだ人というのは大坂とか都市の人が多かったのでしょうか。だから、四国 88カ所巡りに行こうと思った人は四国の人だけではなくて、むしろ遠く離れた特に都市に住む人達だったのではないかと推測しています。そういうふうに考えると、ある意味、出版を機に、四国と本州というか、まあ瀬戸内海というのは昔から海洋の国道ではあったのですが、その四国の中にはいったら 88カ所があるというのが良かったと思うのですね。

だから、このようなガイドブックというか、メディアをきっかけにして、都市と農村というか、四国というある意味で離れたところにあった地域が繋がるといふか、交流関係が生まれる、なんかそのような意味合いを持ったのかなと思っています。で、まあ今ご存知のように 88カ所というのが、四国の観光資源としてアピールされようとしています。国もそういうことから、観光施策の面から注目しているのですが、どうなのですかね。そういうふうに考えた場合、江戸時代におけるそもそもの都市の交流というのが、現在の 88ヶ所巡りとかに、どう生かされて行くべきなのか、そこらへんについて。

[稲田先生]

地元の人との交流が、やはり一番ありがたいと思うようです。私は歩いたのですけども、究極のお接待というのは、僕は拝んでもらいました。朝、お寺を出る時に、村の人が 3人ぐらい寄って来て、遍路さんを拝んでくれるのです。自分が拝まれるような人間でもないし、そんな立派なことをしているとは思えないのだけれども、そういう経験をする事によって、自分のやっていることが、ある意味誉めてもらえているというような形になりました。そういう経験ですね。お接待を受ける。修業をしている人を善人とみなして良い人、つまりお遍路さんの格好をすれば善人として扱ってもらえます。たいていの人に来て、絶対に悪いことをしない人みたいに扱ってくれる。こういう四国の習慣というものが、お遍路さんに対する影響といますかね。大きいものがありますので、たぶん世界中のどこに行っても、こういう形で観光者と住民との関係を築くという観光という例はないように思います。外国人が今すごく来ているのですけれども、彼らも四国の人がお遍路さんに接してくれる気持ちのようなものが一番ありがたく感じているし、それを探っていくと、真念が宿を貸す人を探して書くことに繋がるのですね。ああいうのに行き着くのでは

ないかというふうに思っています。

今、お接待の起源がどこにあるかというのはよく分かっていないのですけれども、たぶんここにもその根っこの一つがあるのだろうと想像を巡らせています。まあ、地元の人とそれから周りの人との関係というのは、この時代に大衆が回り始めると、それを支えるための仕組みをいっぱい作って行くということの中にあったのかも知れないと思います。ちょっと的外れな答えかも知れませんが。

[本城先生]

先生は十分研究されてきましたけれども、まだまだ研究の余地があると思いますよね。それをなされば先生は真念に近づきます。そして、現在の真念になれるかもしれません。なられた時にはもう一冊本をお書きになれることを楽しみにしております。ありがとうございました。